

まえがき

もう大分前になりますが、『週刊大衆』に「河内の百姓地球を耕す」というエッセイを20回の連載で書いたことがあります。その頃はまだ生まれ故郷の河内で百姓していて、土地柄、気性が荒く、内容もやんちゃ丸出しという感じでしたが、地球を耕すという気概に燃えていました。

日本の農業は高度成長期以降、斜陽産業として、どんどん片隅に追いやられてきました。その上日本の百姓は地球どころか、ほんの猫の額ほどの面積を耕して生きているのですが、そのマイナーな、あるいは辺境の位置から見えてくるものをよりどころとして、地球を耕すという意識を常にもっていました。「地球を耕す」というのは大ボラでも何でもなく私の農の姿勢でしょうか。

それからまもなく私は熊野に移住しました。生まれた土地だけでなく、自分の選んだ土地でやってみたかったからです。そしてそこをもう一つの故郷にするつもりでした。住んでみてやはり熊野が大好きになりました。生まれ故郷の河内への思いは変わりませんが、それに勝るとも劣らぬくらい熊野に愛を感じています。私はいわば「よそ者」ですが、「よそ者」であるが故にネイティブ以上の愛をもち得ると思っています。

本宮の現在の地に来たのは、外から見れば偶然なのですが、この場所に案内された時、「こここそ探し求めていた場所だ」と直感的に思ったのです。熊野は河内に比べたら、随分上品でおっとり

した所で、私もだんだんそれに染められ、穏やかになりました。歳のせいもあるのでしょうか。

熊野は「神の国」とか「甦りの地」と言われるだけあって、私のようなものにもそここに神の気配が感じられます。ここで暮らすうち、毎日お祈りせずにはおれない神様オタクになってしまいました。昔、ドリス・デイの歌に「ティーチャーズ・ペット（先生のお気に入り）」というのがありましたが、私はさしずめ「ゴッズ・ペット」というより、それに憧れているのでしょうか。

河内にいる時は、人間の力で地球を耕そうと意気ばっていました。本宮に移ってからは、神の力を借りて、神と一緒に地球を耕そうと思っています。私は霊能者ではなく、神の声がきこえる訳ではありませんが、宇宙の根源とつながらなければ、人類の未来はないということぐらいは、はっきりとわかります。世界が新しい社会へシフトしていく時、農や自然は重要なファクターとなるだろうし、それにも増して神の参加は欠かせないものとなるでしょう。

熊野の百姓地球を耕す●目次

まえがき 3

関連地図 13

熊野古道とその史跡など 14

序 章 がんばれ日本3題——2011年初秋——

2011年初秋……………16

キラッと生きる 16／時代の子供 18

なでしこジャパン 21

第1章 熊野出会いの里誕生の頃

2006年夏……………26

熊野出会いの里誕生の頃 26／色即是空 空則是色 32

紫蘇もみ 36／ニガウリ 37／梅雨の旅人 38

2006～7年冬……………41

匂う黒髪 41／柿の木讃歌 43／人間国宝 46

芋煮会 50／知事選に思う 52

第2章 秋天来了

2007年早春.....	56
私の九条 56 / 秋天来了 64 / 講談 清水和子 70	56
2007年初秋.....	73
食糧危機など怖くない!? 73 / 瓜生さんのセミナーを開催して... 81	73
大斎原と元気な熊野 85	85
2007～8年冬.....	91
今日のお客様 3編 91 / 鶏騒動記 104	91

第3章 時には大空を飛んでみよう

2008年初夏……………108

豊穣のムラ 108／国とはやつかないもの 118

2008年秋……………122

断食入門 122／甲田先生、また会いましょう 130

私は落花生である 134／キューの一生 136

2008～9年冬……………139

時には大空を飛んでみよう 139／甦る日の喜び 144

追悼 152／虚と実 156／紀州熊野応援団のこと 159

第4章 さあどうする日本の農業

2009年初夏	164
再び、三たび我が愛する熊野川	164
私の神経症体験 1	171
鶏は地面に	177
2009年秋	182
さあどうする日本の農業	182
葦舟と石川仁さん	192
私の神経症体験 2	196
観光立国	202
2009年冬	203
川の詣で道	203
みんなまとめて出直しだあ	205
ちよっと一服	209
私の神経症体験 3	211
表紙のことば	222

第5章 熊野にいらっしやい

2010年初夏	226
満開の桜	226
熊野にいらっしやい	227
熊野にいらっしやい	227
無題	227
私の神経症体験4	239
2010年初秋	250
第十二回熊野出会の会	250
瓜生さんのお見舞い	255
私の神経症体験5	261
芋煮会のお誘い	275
2010年冬	277
百姓讃歌3題	277
「全国農家の会」に参加して	285
私の神経症体験6	289
葦舟の奉納	292

第6章 真人間になろう

2011年春……………296

ひのもとおにこ 296／真人間になろう 298

幕末の志士たち 302／T P Pと私家版食管制度 312

東北関東大震災に想う 318

2011年秋……………323

水と電気と通信 323

大人しい熊野人も今度ばかりは怒り心頭である 325

田と畑の被害 334

終章 第三の人生——2011年初秋——私の神経症体験7

関連地図



熊野古道とその史跡など



- | | | | |
|---------------|---------------|------------|--------------|
| ① 水無瀬神宮 | ⑩ 牛馬童子像 | ⑰ 飛雪の滝 | ⑳ 八鬼山峠 |
| ② 八軒屋船着場 | ⑪ 発心門王子 | ㉑ 瀨八丁 | ㉒ 馬越峠 |
| ③ 藤白神社 | ⑫ 大斎原 | ㉓ 風伝峠 | ㉔ 始神峠 |
| ④ 湯浅町(醤油発祥地) | ⑬ 大雲取越え・小雲取越え | ㉕ 丸山千枚田 | ㉖ 紀伊の松島 |
| ⑤ 道成寺 | ⑭ 青岸渡寺 | ㉗ 七里御浜 | ㉘ ツツラト峠 |
| ⑥ 丹生都比売神社 | ⑮ 補陀洛山寺 | ㉙ 花の窟 | ㉚ 荷坂峠 |
| ⑦ 慈尊院・丹生官省符神社 | ⑯ 富田坂 | ㉛ 鬼ヶ城 | ㉜ 三瀬坂峠 |
| ⑧ 果無峠 | ⑰ 長井坂 | ㉝ 波田須・徐福の宮 | ㉞ 柳原観音(手引観音) |
| ⑨ 高原熊野神社 | ⑱ 橋杭岩 | ㉟ 橋ヶ崎 | ㊱ 女鬼峠 |

第1章

熊野出会いの里誕生の頃

2006年夏

熊野出会いの里誕生の頃

私が本宮ほんぐうに引越したのは2000年の7月初め。今は亡き鈴木末広君の熱心な誘いに応えてのことでした。末広君と出会ったのはその1年前、第一回熊野出会いの会を企画し、その呼びかけで東牟婁ひがしむろ、西牟婁にしむろを回った時のことです。

本宮には以前から知り合いの松井利延君が居て、「本宮で一番確かな人物に会わせて欲しい」と言うと、彼は末広君に会わせてくれたのです。

顔合わせのその日は大雪で、中辺路なかへじから本宮方面へ向かう車が次々にUターンしていく中、何が何でもという気持ちで本宮に辿り着いたのです。雪のせいで予定の会合が中止になった泉町長も同席してくれ、大いに夢を語り合いました。

講師陣の充実、参加費用の安さなども手伝ってその年の出会いの会は大成功でした。翌年も又やろうということになり、再び本宮を訪れ、末広君に協力を頼みました。この頃から彼と急速に親し

くなり、本宮に来て一緒にやらないかと何度も誘われたのです。私の方も一年前から佐本（すさみ町）を出ようと思つて引越し先を色々探していたのですが、なかなか適当な場所が見つからず困っていました。

佐本は人口300人余りの、すさみ町の山あいの過疎地です。1997年4月に、22年間の大阪での農業を店閉いし、もう一度見知らぬ土地で一から農業をやりたくてここに移住して来ました。

何しろ還暦のオヤジをつかまえて若い衆と言ふムラですから、当時52歳の私を見て、えらく元気のいいのが来た、と思われたのです。早速佐本を活性化する会のメンバーに加えられ、そのうちけん引役を担うことになります。ムラの活性化を夢みて東奔西走。今一步という所までいったのですが、結局よそ者の私にはハードルが高く、ここで骨を埋めることはできないと決意するに至りました。

そんな訳で、今度はこの時の経験を生かし、本宮の地で私より若い、末広君と新しい挑戦をしようと思つたのです。

私の本宮行きに対し、一つだけ条件を出しました。それは私が拠点とする場所を見つけて欲しいということ。返事はすぐにあり、早速出向いて3カ所案内してもらいました。その最後に来たのが現在の出会いの里のある場所（高山）です。

そこはシイタケ栽培をしていた跡地で、その時建てられていた小屋が2棟残っていました。熊野川を見おろす高台にあり、正面から支流の大塔川（おちうがわ）が注ぎ込み、観光で売り出せる程の景観です。ぐると見渡して平地が一町歩ほどあり、日当たりも申し分なく、いっぺんでこの土地が気に入ってしまいました。



「ここに決めた」と言うと、「そんなに簡単に決めていいのですか」と末広君が言いました。「ええんや」「この土地を手に入れるのはむずかしいですよ」「いや、大丈夫。」

土地が決まれば善は急げ、地主との交渉です。相手に会う前に、名前をきいてびっくり。その名はこれより遡ること数年前にきいたことがあったのです。「アサリさん？ オイ、俺その人知ってるぞ」。

そういえばここは本宮町の高山。高山といえば、当時この丘の上までは来なかったが、丘の下の河川敷の田んぼまでは来たことがありました。まだ佐本に入植する前で八尾の甲田光雄*先生の所で知り合いになった、浦木林業の浦木清十郎さんに案内されて、土地探しに熊野中を駆け巡っている時でした。

山の中には比較的広い水田群が気に入りに、土地の交渉をするための水先案内人として浅里さんを紹介されたのです。浅里さんとは電話で話し、何日何時に会いましょうという約束をとりつけたのですが、当日親戚の方の葬式でキャンセルとなり、そのままついぞ一度も顔を合わすことなく、私は間もなく佐本に入植してしまっただけです。

末広君に聞くと、浅里さんも、「アサノさん？ その人なら知ってる」と同じことを言ったそうです。こんな偶然があるでしょうか。これはもうまちがいないく、熊野の神々に導かれてここに来たのだと思えました。末広君によると浅里さんとの交渉は難航するだろうということでしたが、私には絶対的な自信がありました。それはもう神がかり的なもので、直観としか言いようがありません。予期

した通り、話し合いはスムーズにまとまり、あつという間の手打ちとなりました。

さて土地が解決すれば今度は家ということになります。末広君によれば、発心門ほっしんもんに山持ちの古い家があり、ただで譲り受けられるというのです。早速友人数人でその家を見に行きました。

ここも見晴らしのいい高台にあり、表のモミジの古木が印象的でした。家は既に廃屋、屋根の一部はくずれ、巨人の指でちよつとついたら忽ち倒壊という風情。中も相当傷んでいるが、太い松の大黒柱がひときわ目立ち、みんなはその柱一本に魂が引き寄せられ、「もらおう」ということに決定。ただし、この家に至る車道がなく、搬出は相当な出費が予想されました。

家主の栗栖さんに伺うと、この家はこれまで梅原猛、中上健次をはじめ色んな人がもらいに来たが、搬出困難というので断念したそうです。ところが今回、栗栖さんのはからいで道がつけられ、アツという間に運び出すことができました。

「この家は俺を待っていてくれたんだ」。心の底からそう思われて、特に末広君、栗栖さん、移築全般を請け負ってくれた海野さん、それに尽力してくれた全ての人に感謝しました。初めて古家を見に行ったのが2000年5月9日、棟上げが7月13日、そして10月11日にはオープンング・パーティー。

この間のエピソードを一つあげておくと、6月8日、末広君、海野さん、私と身内で地鎮祭をし、夕闇迫る頃その酒を3人で飲みました。月はまだ太つてはいないが、前に座っている人の顔がはつきり見えるくらい明るい。初夏ではあったが、春風しゅんかぜ駘蕩たいとうという気分、三人とも、幸福感に包ま

れていました。

「月は綺麗やし、酒は旨いし、この上ホテルでも飛んでいたら最高やなあ。」私がそう言うと、末広君が「あれ」と指を差したのです。まさにそこには、たった一つだけどホテルの火が浮いていました。

「さすがにここは熊野やネエ。役者はみんな神が用意してくれる」

オーブニング・パーティーもやはり月の夜でした。完成した家に電気はなく、ローソクや松明の火が野趣をそぞりました。六十人余りの人が集い、野外の各々のテーブルで食事をしました。適当な暗さの闇が人々の緊張を解き、解放された感情が暖かな波動となつて出会いの里の庭を包んでいました。

福井幹つぐもとさんの笛の演奏が始まりました。もの悲しくも力強い笛の音は、月光の森にこだまして、森の樹々たち生き物たちも耳を傾けます。ありとあるものが、この小さな行事に参加して、熊野出会いの里の誕生を祝福してくれていました。

「熊野出会いの里」という名称は末広君が「熊野出会いの会」にヒントを得てくれたものです。素直ないい名前です。末広君のこの遺産をこれからも大切にしていきたいと思えます。

* 八尾の甲田先生…大阪府八尾市在住の甲田光雄氏は、断食療法・食事療法の大家で、薬を使わず

難病の治療にあたり、多くの治療実績をもつ

色即是空 空即是色

「色即是空」というコトバを日本人ならば一度もきいたことがないという人はいないでしょう。しかし、「空即是色」となると「色即是空」ほどポピュラーではありません。

これらのコトバはおシヤカさんの般若心経に出てきますが、同じ語をひっくり返したただけなので同じことを単に言い替えていると思っている人も多く、「色即是空」だけで事足りるという人もいます。しかし、この「空即是色」がお経の中で最も大切な所で、これを削ったり、いいかげんに扱ったりするなら、画龍点睛を欠く、どころかこのお経自体の意味をなさなくなります。

かく言う私自身とてもえらいそうに言えた義理ではなく、最近までこの「空即是色」の意味が解りませんでした。学者先生やえらいお坊さんの解説に接しても、納得のいくものではなく、それぞれか本人さえ解っていないのじゃないかと思われました。その理由が最近やっと解ったのです。

つまり「色即是空 空即是色」というのは、おシヤカさんが頭の中で考えた世界ではなく、直接体験の世界だからなんです。それも私達凡夫が五感・六感を使って体験する日常体験ではありません。真理の世界というのは、脳をひねくり回して解釈できるものではなく、脳の外に出なければ解らないものです。

宗教というのは哲学ではありません。世界をどう解釈するのかわく、世界そのものを、真理そのものを直接体験するのが宗教です。宗教学者やえらいお坊さんがトンチンカンな解釈をするの

は、「色即是空 空即是色」という真理を体験していないからなのです。

前置きはそのくらいにして本題に入りましょう。まず「色即是空」ですが、これは人口に膾炙している分ちまた巷では俗っぽく解釈され、この世の中に永遠に続くものはない。どんなものでもやがて朽ち亡びる。全てはうつろいゆくもの。自分自身とて例外ではない。一見華やかに見えても全て空なのだ。『だから何をしたって虚しい』というのと、『だからこそこの瞬間、瞬間、生命を燃やそう』というのに分かれませんが、どちらにせよ同じ穴のムジナです。この解釈では究極は虚しい。

それではオシャカさんの真意は何か。おシャカさんは虚無を説いた訳ではないのです。虚無の奥、虚無極まって実になる、という世界を説いたのです。ここでいう「色」というのは文字通り色なのです。物には必ず色があり、色は物のあらわれを言います。つまり、そのあらわれ出たもの、五感に感じられるものが色であります。ここで言う色とは現象界全てのものを言います。おシャカさんは現象界の一切のものは空であると断ぜられます。もともと昨今の自然科学の進歩によって、この世界の物質の正体が明らかにされつつあり、「色即是空」というのは納得され易くなっています。

中学の時、物質の最小単位は原子であると習いましたが、その原子の大きさを球場に例えると、真中にある核はフットボールの大きさ、球場内を飛び交う電子たるや砂粒の大きさであり、あとはガランドウです。

私達の目のレンズの倍率を上げ、10の30乗分の1センチメートルぐらいのものが見える視力をもつたとしたら、この世の中はまがいなく空、ガランドウに見えるはずです。核や電子とて倍率を上

げればやがて見えなくなることでしょう。つまりこの世の中のこと、人間の五感（せいぜい六感）を通して認識しているだけであって、その約束事の中での世界認識である訳です。

ということを入れて「色即是空」に接した時、このコトバがもつ現実味を帯びてきます。おシャカさんは科学が見るより2500年も前に、この現象の奥にある世界を体験したのでしよう。そして一切を空であると断じることによって、全ての把われを捨て去ったのです。カラッポになった自分、カラッポになった世界、そのままであるなら虚無です。

しかし現象の自分が空になり、現象の世界が空になると、そこに同時に満ち満ちた自分、満ち満ちた世界が立ち現われるのです。自分がなくなつた時、自分の全てになるのです。何故かというところ、フイクションの自分、想念によって作られた自分が退場することによって、その空け渡された場と神と直結した本性としての自分が入ってくるからです。空の場は実相の神の光で満たされるのです。色即是空を経ることにより、実在界が顕現したのです。これがおシャカさんの「空即是色」です。

つまり「色即是空」と「空即是色」はあくまでワンセットであり、単なる言い替えなんかではありません。この二つに時間差はなく、同時に起きています。しかし「色即是空」の「色」と「空即是色」の「色」は全くちがうものです。五井昌久先生*によれば、前者である往相おうそうの「色」は仮相の色（もの）であり、後者の還相げんそうの「色」は実相の色（光）ということです。

もしも人間に心というものがなかったら、五感の捉え得る現象の世界を平板的に体験するだけで

充分なのかもしれません。しかし心というものは五感の世界に大人しくつなぎ止めておくことはできません。心は自覚的には知らなくても、無意識の中では真理のにおいを嗅ぎとっていて、現象として体験するだけでは満足できなくなるのです。

私達が肉体をもち、五感をもって生まれてきたのは、この現象界で生きていくためです。しかし現象界でよりよく生きようとすれば、五感や肉体を超え、現象界をはみ出さなければならぬのです。皮肉というか、不思議というか、当然というか、そういう立場に私達はいるのです。「色即是空 空即是色」というのは悟りを開いた人だけの世界ではなく、この現象界をよりよく生きたいという凡夫の私達にとっても、大きな啓示を与えてくれます。

これは私の個人的な体験ですが、29歳で神経症になり1年余り七転八倒、何度か死の淵までいき、森田療法で克服しました。その過程で農業との出会いがあり、半年ほど昼間は農業、夜は塾の教師をしていました。しかしそろそろ自分の進路を決定しなければならぬと思っていました。

森田療法の医者になるか、幼児教育をするか、学問の道をいくか、物書きになるか、百姓になるか、心は千々に乱れるばかりです。このままだとまた頭がおかしくなると思い、ある夜真剣にそのことに向いました。全ての常識を蹴とばし、自分の一番やりたいことを選んだのです。

「本もペンもみんな捨てたぞ、オレは鍬一本で生きるんだ」そう思ったとたん不思議なことが起りました。この世の快楽を超えた快楽の中に突然投げ出されたのです。あらゆるものが自分と調和し、平安と安心で全身が包まれる。何より驚いたのは、自分の体重がなくなっている。畳に坐っていた

のですが、畳との接触感がないのです。宙に浮いてるんじゃないかと尻の下を見たぐらいです。

この時体験したのは、五感的なもの、日常的延長線上にあるものではなく、現象界の奥にあるものでした。エクスタシーは数分続いたでしょうか。それから今日までそのような現象は二度と起らなかったのですが、一体あれは何だったのでしょうか。

心が魂の欲するものを見つけ、心と魂が合体した瞬間だったのでしょうか。いずれにせよ引力から解放されたあの数分間が、私の人生を決定しました。所有することより放すことの大切さを学びました。あの時真正銘本もペンも捨てました。その瞬間、本もペンもより身近なものになったのです。

この体験を通して見えてくるものは、あらゆるものを放した時、あらゆるものが自分のものになる（というより自分と正しい関係になる）。自分を放した時自分の全てになる（正しい自分になる）。それが私のささやかな体験を通して見る「色即是空 空即是色」です。

*五井先生…五井昌久氏は宗教家で世界平和の祈りの提唱者。「世界人類が平和でありますように」

紫蘇もみ

市村さんと梅干し用の紫蘇もみをした。炎天下で、いい加減にシゴいて収穫したので、コンテナ

に詰めこんだのをもう一度そうじすることにする。病葉や緑つぼい葉、虫の卵のついている葉、それに軸などを取り除くのである。紫蘇12〜3キロというとなかなかの量なので、丁寧にする結構大変である。

それでもやっているうちに、その一枚一枚に愛情が湧いてきて、その一枚一枚が何だかかけがないもののように思えてくる。「そういえば、オレの子供の頃はこういう作業が多かったなあ」

大豆や小豆のそうじも、祖母や母がよくしていたものだ。それは普通の暮らしの光景だった。昔のサザエさんの漫画にも日常の一コマとしてそういう場面が出てくる。夜なべ仕事に石うすを引くこともあった。人間の口に入るまで、手間のかかる分、食べ物に対しての思い入れは深くなる。家庭の中で大人も子供も関わった。食べ物に金銭で買えるもの以上の何かであった。

そうじした紫蘇を今度は塩でモミながら、今でもこうして食べ物とつき合える幸せを大いに感謝した。

ニガウリ

新しい家のベランダは日当たりがいい。冬は暖かくていいが、夏は暑い。何か陰になるものはないかと思うが、人工物は面白くない。それなら植物、どうせなら実のなるものの方がいい。そこで選ばれたのがニガウリ。ニガウリは勢力旺盛で夏には滅法強く、秋風の音をきくようになって枯

れることはない。その上栄養豊富、自身が元気なだけでなく、人を元気にする。ニガウリを常食している沖縄は有数の長寿県。沖縄人はニガウリのことを「ヌチグスイ（命の薬）」と呼ぶそうだ。

「桃の花が咲いたらウリの種を落とせ」と言うが、3月下旬に播いて苗を仕立てる。そして5月初旬に大きなプランターを九つ並べ、各々一本ずつ定植。6月にはネットを張ってその辺の雑木で棚を作る。7月にはツルはネットの上まで届き、棚を這い始める。朝起きたら一番にこのニガウリ達の様子を見る。長年百姓で飯を食ってきたが、今回は家庭菜園の喜びだ。ある意味、プロの農家より家庭菜園の方が植物に対して純粹になれる。無邪気につき合える。

日が傾くと客人は棚の下にしつらえた食卓につく。ニガウリの微かな香りが鼻腔を巡り、切り込みの深い小さな葉が夕風に慎しく揺れる。食卓にはゴーヤチャンプル、鮎味噌キュウリ、焼きナス、トマト、枝豆、シシトウ、オクラと畑の幸が並ぶ。コップにビールが注がれる。私はアルコール法度なのでノンアルコールビール。客人の満足気な顔、顔。夏宵一刻値万金。この至福の宴にどうぞおいで下さい。ニガウリさん、ありがとう。

梅雨の旅人

6月の中頃、畑でトマトの手入れをしていたら、大きな荷物を担いだ人がやって来た。髪は短く、色は日焼けでまっくら。パッと見男か女か分からないが、声をきいて女だと分かった。「あのう、

ここで農作業の手伝いをしたら泊めてもらえるときいて来たんですが。「オレはそんなこと言いた覚えはないよ。何拠か他所ほかとまちがつてるんじゃないか」とは言ったものの、これも縁だと思いい母屋に案内する。

話してみるとなかなか面白い経歴の持ち主であった。年の頃30代半ば、よく見ると愛敬のある可愛い顔をしている。南米のパラグアイの生まれ。おじいさんが移民で渡ったそう。両親と小学校の頃日本へ帰って来た。大人になって何年も世界中を放浪していたらしい。今回は四国の八十八カ所を巡り、徳島からフェリーで和歌山に渡り、高野山に参って小辺路せべじを通り、龍神りゅうじん・本宮ほんぐうに至り、那智なち、速玉はやたまを巡って再び本宮に来たそう。

ウウム、なかなかのつわもの、これからの予定をきくと、奥駈けに挑戦したいとのこと。梅雨が明けると、滞在が少々長引きそう。晴れた日は百姓のお手伝い。抜群のスタミナ。田や畑で働く姿を見ていると、十里、百里、と黙々と歩く様を彷彿させる。

彼女の食事は完全自給。全て出会の里の米と野菜を使う。野菜で足りない分は市村さんに教わって色んな野草を摘んで食べている。何を食べても「ウマイ！」とマイにアクセントをおいた関東弁の発音で言う。

少しばかりのお金しか持たず、その地の庶民ないし貧民層と同じ目線で旅しているので、人間に対する洞察が深い。その地の人が置かれている自然環境、社会環境によって文化が各々異なること、物の見方、考え方が異なることをよく知っている。反対に人間として共通の感情・スピリットをもっていることもよく知っている。身体を賭して、生命を賭して知っているのだ。百万巻の書を読ん

でもかなわない。

異文化を旅することによって、異ったものを異ったものとして平等に見る優しさが備わり、身体一つ極限の状態で関わることによって、人間は究極は同じなのだという深い信頼が生まれたのだ。

「貧しい国に行くと、お腹が減って倒れそうでもなかなか助けてくれない。でも最後は助けてくれる。そこでは自分のものは人のもの、人のものはじぶんのものっていう感じ」。

梅雨が明け、明日はいよいよ出発という晩、ニガウリの棚の下でお別れパーティーをした。私と佐代と市村さん、横山君、そしてナナちゃんの5人。市村さんは女性は苦手というタイプだが、彼女についての感想は舌が滑らかだ。放浪については市村さんも武勇伝の一つや二つ持った人だが、彼女には脱帽。尊敬の念すら感じるといふ。横山君は五十男だが、はるか年下の彼女を姉のように慕い、彼女の滞在中とても嬉しそうだった。身体を鍛えていつか彼女についてインド旅行をしたいと言う。

佐代と私は何人目かの旅人を見送る。もともとまちがつて迷い込んだ人だが、まちがつてなかったんだと思つた。まちがつて起ることはない。起ることはみんな正しい。次はどんな人か来るのだろうか。本当に出会いの里はいい所だ。

2006～7年冬

匂う黒髪

数年振りの高校の同窓会に参加した。やはりみんなこの前会った時より明らかに老いている。幹事の報告によると、亡くなった同級生も三十数名になるといふ。現に高校時代大の仲良しだった友人も数年前に他界した。まだ老人会という所まではいかないが、殆んど人は第一線を退いている。しかしどんなに姿形は変わっても、面影は残っているし、高校時代の本人とダブって見ている。

卒業した年に舟木一夫の「高校三年生」が大流行した。彼は我々と同じ年ということもあって、締めはこの歌をみんなで唄うことがある。高校の同窓会というと、反射的にこの歌が浮かんでくる。「ぼくらフォークダンスの手をとれば、甘く匂うよ、黒髪が」

という所が私は好きだ。

卒業が間近に迫った頃、3年生全員でフォークダンスをすることになった。二つの列に分かれて次々にパートナーを替えていく。女子は男子の半分しかいないので、なかなか女子に巡り合えない。

「そのうちに」と期待して、我慢強く同性の相手を務めていたが、とうとう最後まで匂う黒髪に出会うことはなかった。その時の落胆たるや、同窓会の度に思い出す。

悲劇の原因は、担当の教師が分割を公平にしなかったからである。片方は女子プラス男子、片方は男子のみ。これでは、女子プラス男子の列に入ったものは、永遠に女子に巡り合うことができないではないか。未だに忘れず口惜しがる程、甘く匂う黒髪は胸をときめかす憧れであった。

黒髪の思い出といえばもう一つ。本当はこのことを書きたかったのだが、あれは中学3年生の時だった。前の席に私の好きな子が座っていた。私は何かを作図していた。その子は後ろを向いて、その作業を見ていた。その時何かの拍子に髪と髪がわずかに触れた。それでもその子は、そのままの状態で私の作業を見ていた。私は気が狂わんばかりの嬉しさで、全身髪の毛になって、その子の全てを感じようとした。その幸せの美酒を一滴も逃すまい、と全神経を集中していた。

教師もクラスメートも居る教室の中で、憧れの少女と白昼共犯劇を演じているという意識が至福感を一層大きくした。それはほんの数秒か数分の出来事だったが、比類なき濃さで、今でもあの時の情感がまざまざと甦える。

あれから50年。黒髪の彼方にあるものを次々に踏破し、探険し尽くしたが、匂う黒髪に優るものはなかったようである。

目の前の少々くたびれた元女子高生をながめながら、そうそう、御礼を言っとかなければ、と思つた。

「その節は、匂う黒髪、どうもありがとう」

柿の木讃歌

10月26日は柿の日だとテレビが言う。西吉野にしよしのの農家が提案して採用されたらしい。何故この日かと言えば、正岡子規が「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の句を作った日だからだそう。子規は柿が大好きで、この日奈良の宿にて女中に御所柿を所望している。お盆に山盛りの柿がテレビで、再現されていたが、残念ながらそれは御所ではなく平核ひらたね無という品種だ。

そんなインチキはよくある。私は商売柄、農業関係には敏感に反応してしまう。例えばドラマで戦後の食糧難の場面にサツマイモがよく登場するが、それが紅あづまだったり、鳴門金時だったりする。しかしその当時、こんな色鮮やかな美しい品種はなかった。最もポピュラーであったのは、丸型で果肉の黄色いゴコクという品種である。

また時代劇で水田の場面。これが機械植え。手植えと機械植えは明らかにちがうので、カメラアングルを考えて撮らないとすぐ分かってしまう。それでも興醒めしたりする。「おしん」などでも、農作業の場面は、本当にお粗末でリアリティーがない。NHKの朝ドラ等は農家のファンが多いが、あんなへつぴり腰の鋤使いを見せられると、チャンネルを替えたくなる。農にまつわるこういういい加減な場面ばかり見せられると、テレビ関係者の農業に対する無関心、蔑視を感じる。方言指導

と一緒に、農業指導も受けてもらいたいものだ。

ついつい脱線が長くなつたが、柿の話に戻そう。私は今、子規とちがい、鹿の声をきいて柿を食っている。さしずめ、「柿食えば鹿が鳴くなり奥熊野」というところか。秋は交尾の季節。牡鹿が牝鹿を呼ぶ声だ。ヒューという甲高い声をきくと、秋の深まりを感じる。

私が食しているのは先程の平核無という品種、渋柿だ。収穫し、渋を抜いて、さわし柿にする。

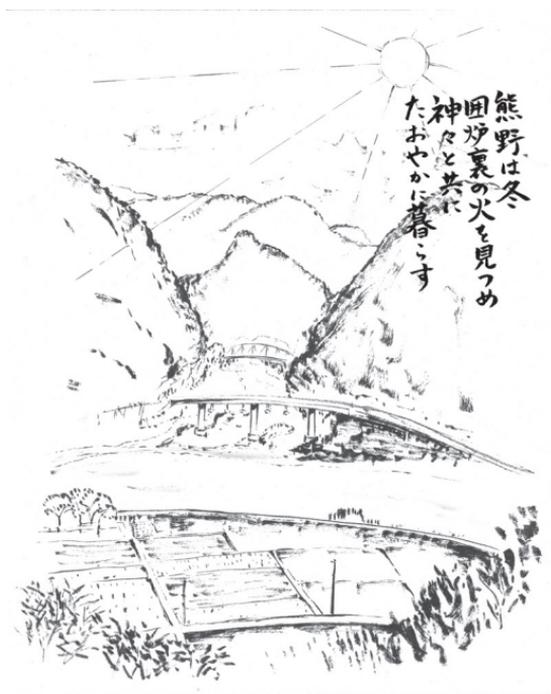
この柿の木は大阪の実家にあり、私の小学生の頃植えたものだ。3本あったが、1本切つて今は2本。隔年結果もなく、毎年よく実をつける。「柿の木は危ない」というので、子供の頃は絶対に登らせてもらえなかつたが、高校生になつて止める人がいなくなり、初めて木に登つた時、ああ大人になつたんだ、と感無量だつた。

米一俵かつげるとというのが農家の元服だが、柿の木にフリーパスというのも大人として認められた証拠だ。それから幾星霜、この柿の世話をずつとし続けてきた。

私の専門は野菜作りだが、トマトやキュウリ等の1年ものと、この柿とでは愛情の深さがちがつてくる。毎年積み重ねて半世紀というのは生半可ではない。熊野で暮らしていても、熟れる時期には必ずこの柿の木の前に立つ。

今年も留守を預かる娘とコンビで収穫した。もう還暦も過ぎたが、申年さるのせいもあつて、まだまだ木の上で違和感はない。老木にいたわられる老人の図といったようなもので、柿の木の上で一人悦に入っていた。

それでも気は抜けない。柿の木には枯枝が沢山ついている。これが危険なのだ。注意して見れば、



枯枝には葉っぱがついていないのですぐ分かるが、木肌だけでは区別がつかない。夢中になってとつていると、つい足をかけてしまう。そうなれば百発百中、その枯枝とともに人間も落下することになる。

私もやはり二、三度落ちたが、そのお陰でこの歳になっても、内なる子供と存分に遊ぶことができる。地上でエプロンを広げる娘の姿が親指姫のように小さい。そのエプロンめがけて柿を落とす。ストライク。

収穫が終われば、ヘタについた枝をキレイに切り落とし、一つひとつのヘタを焼酎に浸す。それを昔は箱に並べていたが、今はビニール袋に入れ、ある程度たまったら口を閉じ密閉する。暗所に置き、5日もすればシブは抜ける。

私はこの作業がまた好きなのだ。一つひとつの柿に思いを入れる。農の心を伝えると言ったら大げさだが、そういう心意気で作業している。「なんとおいしい柿ですネエ、肥料ですか、品種ですか」と問われるが、肥料でもない品種でもない。それは紛れもなく愛情だ。「柿」と「柿の木」と「柿を食べる人」への愛情だ。私の柿を食する人は幸運な人と本気で思う。子規にも食べさせたかったなあ。

人間国宝

第4章

さあどうする日本の農業

2009年初夏

再び、三たび我が愛する熊野川

近頃、川向うの請川うけがわの羽根さんが出会いの里によく来る。玄関の横で門番みたいに鎮座している和舟の修繕のためだ。8人ぐらい乗れるものだが相当老朽化している。熊野川の三重県側の漁協の組合長をしていた荘司さんにもらったもので、「いつの日か新宮しんぐうまで」の思い熱く雨除けの屋根までつけてもらって、熊野川を見おろしている。

羽根さんは無類の乗り物好きで、バイク、車から船、飛行機に至るまでオールラウンド。会えば時々無駄話をする。そんな中で「この舟を使って昔みたいに渡しがしたいね」ということになり、専ら修繕は定年貴族の羽根さんの仕事となったのである。

今は立派な橋もあるし、わざわざ舟で向う岸に渡ることはないのだが、何か熊野川と肌の触れ合うつき合いをしたいという思いは二人とも同じである。

出合いの里から見える熊野川とその背後の山々が織り成す景觀は誰彼なく、ここを訪れる人の心を奪う。視界を横切るように西から東に向つて本流が流れ、支流の大塔川おおとうがわが南西から熊野川に合流する。つまり出合いの里の前で水と水がぶつかるため、ここにはいつも波動の高い柔らかい気が流れている。

「もつと水量豊かであれば」と思う。私が本宮ほんぐうに抱いているイメージは水の都である。若い頃本宮を訪れたことがある。その頃、熊野やら本宮やらに対して何の知識もなかった。1時間ほど滞在しただけである。その時感じた印象は今でも覚えているが、ここは何て湿潤な、瑞々しい町なんだろうと思つたのである。一体何故あんなこと思つたのか未だに謎だが、ひよつとしたら私の魂が、大齋原ゆのほしに本宮大社があつた頃のことを覚えていたのかもしれない。

少しばかり神懸りなことをついでに言つておくと、熊野の靈力は熊野川と密接に関わっている。熊野川に水を戻さないと、熊野の元来の靈力は甦らない。数年前、ある靈能者に、部屋の中で小さな護摩を焚いてもらった。その時、「炎の中に龍神さんが見える。心当たりはあるか」と言われた。熊野川の化身が私の尻をたたきに来たのだと今でも思つている。

熊野川に水を呼び戻すということと、大齋原に人々の目をもつと向けてもらうというのはセットになっている。旧宮である大齋原に昨今、日本一の鳥居が建立されたが、まだまだ訪れる人は少ない。

明治22年の大水害に遭つて以来、本宮大社は山の中腹に引越したが、もともと川の神様である。御神体は熊野川、音無川おとなしがわ、岩田川いわたがわと三つの川の合流点に浮かぶ森（大齋原）そのものであつたか、

それともそれをも含めた大河そのものであったか知らないが、いずれにせよ熊野川あつての本宮大社であることはまちがいない。

国道168号線沿いに古い鳥居がある。この鳥居をくぐり、石の階段を下り、音無川を渡つてまづ大斎原に詣で、然る後、御幸道ごこうみちを通つて本宮大社にお参りする。この御幸道の両側は水田で、その向こうに熊野川の土手が見え、とても長閑な風景である。春のよき日ここを通ると、きまつて美空ひばりの「花笠道中」という歌の歌詞が口をついてでる。「これこれ石の地藏さん、西へ行くのはこつちかえ」というあれである。

私が中学生のころ流行つた。その頃、まさに高度成長が始まる時期で、それは石の地藏さんを踏みつぶす勢いで進んでいった。しかしそれから半世紀、正気に戻つて、宴の跡を見る時、風景から消えてしまった石の地藏さんを連れ戻したくなる。今この御幸道に茶店を出し田舎道を再現し、時代劇風のセツトにしたなら、詣で人は眠っていた魂を呼びさまされるにちがいない。旧宮と新宮を結ぶこの幅3メートルの道こそ癒しのエリアとして豊かな可能性を秘めている。茶店は固定した建物ではなく川原家がいいと思う。川原家というのは、まだ人々が熊野川を舟で往来していた頃のもので、速玉大社はやたまの前の川原に、最盛期200軒もひしめいた組立式の家である。年に数回、水が出ると30分程で解体し、町は一瞬にして消える。水が引くと忽ち町ができあがる。まさに変幻自在、身軽でアツケラカンとした南国気質、誠に小気味いいが、この川原家を御幸道にもつてくるのである。旅人はしばしの間、古きよき時代にタイムスリップするだろう。

それならばそのまま、もう少しタイムスリップを楽しんでもらおうか。いよいよ舟の出番であ

る。旅人は大斎原の川港から舟に乗る。かつて本宮を訪れた人は、ここから舟で新宮に下った。川の道の復活である。まさかそんなこと、言うだけで不可能じゃないかと大半の人は思っている。それはそうだ。現今の水量ではカヌーさえスムーズに通れない。熊野川は宮井みやいで十津川とつかわと北山川きたやまがわが合流するが、十津川水系だけで何とダムが七つもあるのである。

このダム群について簡単に述べておくと、まず十津川本流では猿谷ダムさるたにがある。このダムは江戸時代からの懸案であった吉野川分水とからんでくる。つまり紀の川の上流である吉野川の水を奈良盆地に流したいが、そうすると紀の川下流地域の人から文句が出るので、それなら熊野川の水を天辻あまづじ峠を越えて吉野川に引っぱってこようということになり、出来たのが猿谷ダムである。昭和32年に完成しているが施主は旧建設省。戦後の復興の一翼を担った鳴り物入りの事業だったハズである。灌漑かんがいだけでなく、上水道、工業用、電源開発にも利用された。

この分水にはまだ続きがある。猿谷ダムが出来て既に50年以上経つが、現在この分水された水は関西空港に供給されているという。毎秒8トン、年間2億トン。それに対し紀の川水系には120億余りのお金が支払われたということだが、親元の熊野川水系は蚊帳の外である。

猿谷ダムの下流の風屋かぜやダムは昭和35年に完成した。有効貯水容量は8900万立方メートルで、猿谷ダムの5倍。その下の二津野ふたつのダムは昭和37年の完成である。二つとも施主は電源開発で、発電のためだけのダムである。その他支流に四つのダムがあるが、全て発電専用ダムで、熊野川のダムはいずれも洪水調節機能を持っていない。その上、発電所には別ルートで水を運ぶため、これが川

かと思う程、河川の流量が減る。更に洪水時には一斉に放流するので、流域住民にとっては、功より罪の方が大きい。この七つのダムの有効貯水容量を合わせると1億4335万トンとなる。これは十津川水系だけであるが（熊野川にはもう一つ北山川水系がある）これだけの水を上流で堰止めれば川が川の体をなさないのは当然である。その見返りとしての恩恵は道路の整備ぐらいだと思われるが、山間地に暮らす人々にとってはそれは何よりの贈り物で、道路は文明の光が入る唯一のルートだと信じられていた。しかし水と道路の交換によって山間地は盛えるどころか益々衰退し、この50年の間に村から人が居なくなり、川から魚がいなくなつた。ではどうすればよかつたのか。ダムなんか作らなければよかつたのか。道路なんかなかつた方がよかつたのか。

個人の趣味の問題は別として、そんな選択はできなかつただろう。近代化というのは世界が選んだ路線であり、我が国とて、我が地域とて、世界の趨勢に棹をささない訳にはいかなかつただろう。

しかし50年経つてその結果を眺め回した時、果して何人の人が「これでよかつた」と言うだろう。川の道から陸の道になつて便利になつたものの、人々の生活は川と疎遠になり、車道から見おろすだけの遠景になつてしまつた。神域の威光を高めた豊かな碧水は、砂州ばかりが目立つ小枝のような流れに変わった。もう尺の鮎はいくら探しても見つけることはできない。黒い集団となつて遡つていった鮎の稚魚たちもいつのまにか消えてしまつた。ダムで堰止められた土砂やヘドロで水は汚れ、ダムの機能が麻痺する一方、砂の補給を断たれた河口の海岸線は波に浸食され抉^{えぐ}られていく。

このような問題をかかえた熊野川の今を知つてもらうためにも、そしてその問題を解決していくためにも私達はもう一度川原へ降り、熊野川との関係を取り戻さなければならぬ。具体的には川



往来に
あじさいさりがなく
咲いて

原でのコンサートや芝居。秋、冬の風物詩としての芋煮会。水泳場の開設など。しかし何と云つても大齋原からの舟下り。これは今までの歴史を踏まえた上で電源開発と交渉し、土、日は観光放流してもらふ。最初は大齋原から敷屋^{しきや}辺りでもいい。だんだん距離を延ばしてゆき、最終目標は新宮までの便を出すことだ。

舟を出すことによつて、大齋原は本来の大齋原に近づく。川の参加により本宮の観光にぐつと厚みがでる。バスからながめる熊野川と、舟で体感する熊野川はまるつきりちがうし、バスからの熊野と舟からの熊野もまるつきりちがう。

英語にアンダースタンドという言葉がある。「理解する」というのは「下に立つ」ことだということはこの外国語は教えてくれる。川はその地形の一番低い所を流れる。その一番低い目線で熊野を見る時、熊野はより一層熊野らしき姿を現わすのではないだろうか。高度成長以降、私達は上へ上への目線に翻弄され、足元の生命のリズムを忘れてきた。もう一度川の流れに目をやり、お寺の鐘の音に耳を傾けませんか。

川向こうの羽根さんは今日も来て、舟の最終チェックをやっている。「いよいよ進水式やね」と声をかけた。時代錯誤の変り者が二人、熊野の明日を夢見て、さてさてどうなりますことやら。

私の神経症体験 1

死に出会う

私の人生で最も大きな問題は「死」であつた。特に若い頃は、そいつに気が狂う程悩まされた。子供の頃身体の弱かつた私はよく病気をしたが、そのたびにもう治らないで死ぬのではないかと小さな胸を痛めていたことを覚えていゝる。

「死」の観念が牙をむいて私に襲いかかつてきたのは、小学校の5年生か6年生の時で、それは全くの不意打ちであつた。小便臭い田舎の映画館で、近所の三つ年下の男の子と並んでチャンバラの映画を見ていた。当時映画は最大の娯楽で、たまたま誰かに券をもらつて子供同士で来ていた。確か鞍馬天狗だつたと思うが場面はクライマックス。嵐寛扮する天狗が木っ葉役人をバツタバツタと斬り倒す。胸のすく見せ場である。

その時何故だか知らないが、私はふと敵側の立場に立つてみたくなつたのである。死屍ししかるいん累々であるが、斬られたあの人達に家族はないのだらうか。まさにそのとたん「死」が私を直撃した。いざずれ自分もこの世から消えてなくなることを現実感を伴つて自覚したのである。消滅した自分を想像する程恐ろしいことはない。

私は一瞬にして映画の外へはじき飛ばされてしまった。相棒には何も言わず席を立ち、外に出る。

恐怖とパニックでじつとしていられず、取り入れの終った稲株の並ぶ田んぼ道をひたすら走った。景色は寒々としてよそよそしく、私は孤独を通り超して、孤絶の中にいた。何と人生とは油断のならないものだろう。今や私は世界の孤児であった。走つても走つても、逃げても逃げても恐怖は追つてくる。このままでは「気が狂う」と思った。逃げることを止め、震えながら幼い頭で必死に考えた。

「今すぐには死なない。死はずつと後のことで、それまでに解決方法を見つけよう」「人は例外なく全て死ぬ。ひとり生き残つてもやっばり孤独だ」。とりあえずこの二つの間に合わせの処方箋をこしらえ、何とかパニックは治まった。しかしそれ以降、「気狂いの種」をかかえておくことになり、長い間「自分が消えてなくなることの恐怖」という鎖につながれることになる。この難問を解かねば自分の本当の人生はないと思いつつながら、問題に向き合うとたちまちパニック状態を呼び起こしてしまうので、そのことを意識的に封印していた。その矛盾の中でけつして暗くはない青春時代を生きたが、心の奥には常に未消化の塊が重苦しく存在し続けていた。何事に対しても価値を見出すことが出来ず、虚無的な日常の海を漂流していた。

学生時代、世はまさに政治の季節で、ベトナム戦争、日韓条約、中国の文化大革命、全共闘運動と生真面目な学生はこの情況に何らかの形で関わっていったが、私の心は政治的なものに対しさほど反応を示さなかった。

私はいわば文学青年であった。しかし他人の詩や小説に興味があつた訳ではない。この様な質の人間には文学みたいなものによつてしか救われないと、あまり根拠もなく信じていたのである。

卒業が近づいても、企業に就職する気は全くなかった。父は小さな会社を経営していたがそれを継ぐつもりもなかった。学者になる程勉強好きではなかったし、物書きで食っていく程の才能もなかった。まさにはない尽くしの八方塞がり、仕方なく故郷の大阪に帰って学習塾を開いた。この頃既に結婚していて、何らかの形で生活費を捻出しなければならなかったのである。

塾は盛況であったが、取り組むべき夢や課題が見つからないまま、時間と共に後退していく我が人生を思い慄然とすることもあった。

神経症になる

毎日焦りを感じながらも、歳だけはとり29歳になっていた。

そしてとうとう怖れていたことが起った。数週間来、舌に異常を感じ、医者に行つたが原因が分からず、四六時中なぜだろう考えているうちに、反芻によつて蓄積されたエネルギーが閾値を超え、堤防が決壊した。濁流は私の虚弱な脳を呑み込み、「今度は本当に狂う」と思った時、異常は舌ではなく虫歯であることに気がつき、ホッとした。

次の日、朝目覚めた時、昨日みたいなことが起つたら嫌だなあと考えた。その瞬間、昨日の心理状態になった。それは、少年の頃体験したあのパニック状態、苦悶発作というべきものだった。発作は一定時間で治まる。しかし恐ろしい発作にまた襲われはしないかと予期恐怖するようになる。

これが問題なのだ。1年に一度か半年に一度か、めつたにやつてこない敵の影を恐れて、片時もその想念から自由になることはない。これが不安神経症という病気であると知つたのはもう少し後だ

が、その日から私は完全な囚われ人となった。

そうなってみると、虚無感が絶望感に変わった。虚無の昔は幸せだと思った。

この苦悶発作、パニック状態というものの原形を探ると、実は小学4年の時にある。近所の川で水遊びをしていて溺れた。アップアップしている時、「ここで死ぬのか、この若さで」と思うと、何とも口惜しく切なく、胸がしめつけられ、頭が爆発しそうになった。この時運よく助かって、恐怖体験はすぐ忘れてしまったのだが、どっこい潜在意識の中にもぐり込み、私の人生を傀儡かいらいしたものである。映画館での発作も29歳の発作も、この時のものと全く同じものである。

さて神経症予備軍から20年かかり正規軍に入隊した私は、更に過酷な体験をさせられることになる。病の初期の頃はパニックに対する予期恐怖であったが、1年程するうち、病膏盲こうもうに入り、常時強い不安を感じるようになった。その不安が極点に達したことがあった。あまりの苦しさのためタミをかきむしり、壁に頭をぶちつけた。その時斧で手足を切り落とされたとしても何も感じない程の苦痛だった。観念の中だけで起っていることなのであるが、それは明らかに物理性を持ち、本物以上の兇器となって肉体の脳を切り裂いた。

私は劫火に焼かれながら人間の業ごうの深さを思い、そのエネルギーの凄まじさに驚嘆していた。人間というものの底知れぬ闇と同時に無限の可能性をも感じていた。「もしこの負の回転を正の回転に変えることができれば、どんなことでもできるだろう」と。

生き物の生理というものはよく出来ている。妻が医者薬に薬をもらいに行っている間に、私は気を失って眠ってしまった。身体の限界を超えると、生理は意識をなくすようになっていく。

朝になって目醒めた時、頭はスッキリしていた。覚悟も出来ていた。「もう俺の手に負えない。入院して森田療法を受けよう」と。森田療法というのは、戦前、精神科医の森田正馬が自分の体験に基いて開発した日本的な心理療法で、神経症の治療に劇的な効果があることが珍しくない。1週間程度の臥褥がじよくと作業、日記指導等を通して自己洞察を深めていく。丁度神経症に罹った年に森田の全集が出て、私は貪るように読んだ。それは命懸けの読者であった。

森田の教え

森田の教えをひと言で言うところ「あるがまま」ということである。「不快」に対して抵抗するな。不快は不快のままにして、やるべきことをやれ」というのである。神経症というのは頭の中で起る、ある「とらわれ」による不快に対して、それを排除しようとして、自分と自分が死闘を繰り返す悲劇であり、喜劇である。不快に対して抵抗を強めると、その抵抗分だけ不快度も増す。益々不快なので益々抵抗を強める。

この「とらわれ」は頭がでつちあげた一種のフィクションであるが、一度その罠にはまると容易に抜けれない。この枯れ尾花と闘う観念論者に対して、森田は事実唯真を説く。私の印象に残っているのは、こういう話である。

森田存命の当時、森田の家に下宿するような形で患者は指導を受けていた。ある日の1コマ。洗濯物が風で飛んだ。そこに行き合わせた患者は急いでそれを拾い棹に戻した。縁側のその様子を見ていた森田は手招きしてその患者を呼んだ。「君、あの洗濯物は乾いていなかったか」。患者はハッ

とする。彼は森田の視線を気にして洗濯物を拾い上げたが、乾いているか確かめなかったのである。又こんな話もある。ある時、森田は拭き掃除の雑巾を患者に縫わせた。一人の患者がその日の日記に「今日はいい運針の勉強になった」と書いた。それに対し森田は「運針の勉強のために雑巾を縫わせたのではない。雑巾が必要だから縫わせたのだ」。

後者は少々極端であるが、神経症者にはこのぐらいの矯正でバランスがとれるのである。

しかしこの私はそういうことを頭ではよく理解し、重々承知しながら体得には至らず、つい入院ということになった。「論語読みの論語知らず」とは誠によく言ったもので、この時ほど体得することの大変さと大切さを知ったことはない。

リトル・トリー

そのことできままつて思い出すのは「リトル・トリー」* という小説である。この作家は幼い頃両親が亡くなりインディアンの祖父のもつと育てられるが、その時の体験をふまえて書かれたものだ。少年は祖父の話すKINというインディアンの言葉に興味をもつ。文脈で考えると、どうもL O V EとUNDERSTANDの意味で使われているようだが、そのことを祖父にきく。「お前の言う通り、時には『愛する』と使われ、時には『理解する』と使われる。でもそれは同じものなんだよ」。ここに「愛する」ことの体得と「理解する」ことの体得が示唆されていないだろうか。私達は自分と対象、主観と客観、精神と肉体などという二元論的な精神風土の中で物ごとを判断し、そういう習慣を骨肉化させてしまっている。その結果、多くの人々は自分達の方法論が、物を知る上で、

たくさんある方法論の一つであるという自覚すらない。むしろ唯一の方法論であると錯覚している。「愛する」ことと「理解する」ことが別のものとする文化と、同じものとする文化。どちらがすぐれているのか知らない。しかしよほどどちらが神の視点に近いかといえは、おじいさんの方であることはまちがいない。

さてその頃近代人であった私は理解と体得の溝を埋めることができず入院と相成ったが、入院に際して医者から「君は森田理論は充分過ぎるくらいだから、ここでは本は読まないで実践するように」と釘を刺された。

*リトル・トリ

フォレスト・カーター著 めるくまーる刊

鶏は地面に

アジア農民交流センターの通信に、養鶏のベテランである山形の私の友人菅野芳秀がヨーロッパの養鶏事情について書いている。出会いの里でも2年前から養鶏を始めたので興味深く読んだ。ドイツでは鶏の福祉の観点から法律でケージ飼いが禁止^{*1}になり、既に2007年1月1日より実施されているという。オーストラリアでも2009年より、EU全体でも2012年よりということだ。

断わるまでもなく菅野の所も私の所も平飼いの自然養鶏^{*2}であるが、日本ではケージ飼いが主流で、

平飼いは統計にも上らない程微少である。生協やら自然食関係の流通でも、扱われている卵の多くは、ケージ飼いのものが多い。ケージ飼いで多少安全に留意されていけば、卵の値段は安い方がいいというのが、生協などの消費者の主流ではなからうか。ましてや菅野も指摘するように、鶏をケージから解放しようと訴える消費者はまずいない。

これは採卵鶏ばかりではなくブロイラーにも言えることであるが、その現場を見ればおおよそ生き物として扱われていないことが分かるだろう。それはもう効率だけを考えた人間のエゴむきだしのシステムであるからだ。

私が残念に思うのは、同じ敗戦国として出発したドイツが官民一体となり、世界に先駆けて鶏をケージから解放したのに、日本は福祉基準を導入したもののまだ具体策が何もないということだ。

1968年、日本は西ドイツを抜いて、GNPは資本主義国では世界第2位となった。しかし年間の労働時間は西ドイツより500時間も多く、有給休暇もなかなか思うようになつたがその反面、身であつた。それから日本は経済を第一に優先し、経済大国と呼ばれるようになったがその反面、暮らし、家庭生活、環境、教育などソフトな部分で豊かになつたとは言えない。

ジョン・ダワーというアメリカの歴史学者は日本を評してこんなことを言っている。「かつて成功した大国は、賞賛とともに世界の人々の憧れを集めたのに、大国日本は羨望なき賞賛を受けている。その理由は五つの欠如にある。その第一は、喜びの欠如した富。第二は、真の自由の欠如した平等。第三は、創造性の欠如した教育。第四は、真の家庭生活の欠如した家族主義。第五に、リーダーシップの欠如した超大国」。これは20年前のものであるが、今もさほど変わっていない。

これに対してドイツはどうか。くり返しになるが日本と同じ敗戦、占領から出発しながらナチス時代を深刻に反省して周辺諸国との信頼を回復し、ECの盟主として指導的立場にある。特に環境問題に対しては世界一の先進国であり、世界の賞賛と尊敬を集めている。

ドイツが環境問題に関心を払うようになったのは1970年代のルール工業地帯で発生した大気汚染を契機としている。しかし本格的に自分達の問題として捉えるようになったのは、チェルノブイリの原発事故以降である。法体系の整備も進み、「次世代のために自然を守る責任がある」ことが、日本の憲法に当るドイツ基本法に加えられ、ドイツの環境保護政策の方向性を示すものとなっている。学校教育においても、各教科に環境に関する事柄が織り込まれ、子供の頃から環境問題に自然に目が向くように配慮が払われている。

エネルギー問題に関しても、風力発電はヨーロッパの約半分を占め世界一だし、太陽光発電も世界一。2010年までの全電力量に占める自然エネルギーの割合を最低12・5パーセントとしたいとしている（因みに日本は同年までに1・35パーセント）。

GNP世界第2位の地位を日本がドイツと入れ替って既に40年経っている。日本も環境問題に無策であった訳ではないが、その間ドイツに大きく水を空けられてしまった。

環境問題というのは畢竟、生き物同士が仲良く暮す土壌作りということだろうし、足元を見据えた等身大の平和運動といえるだろう。

ケージ飼いの禁止法案はドイツで突然降って湧いたのではない。戦争に対する深い反省から生まれ「平和の種」が長い間かかって育まれ、進化してきた結果なのだ。

日本も同じ戦争の苦い経験のある国として、このドイツの行き方に多くを学ぶべきである。占領の幕開けと同時に日本と正反対の圧倒的物量の国アメリカに、真に正反対故に憧れた。そしてその後追いをし、頭の上から足の先までアメリカまみれになった60年であるが、還暦も過ぎたことである。いくら何でもそろそろ頭を冷やしもう一度冷静に世界を見回したいものだ。

たかが鶏の話であるが、その背景にあるものは小さくないと思う。日本中の鶏がいつ頃地面に戻るのか、その一見ささいなことがこの国の実力の一端を表わしていないとは言いい切れまい。

みなさん、1個20円、30円の卵がどれくらい安いか知っていますか。まずは、「安過ぎる卵^{*3}」の背景にあった鶏達の受難の歴史を思いやる想像力と、鶏をもう一度地べたに帰してやる愛を学びとろうではないか。

*1 ケージ飼い

鶏を1羽ずつ狭いケージに閉じこめてエネルギー効率を上げるため身動きできないようにし、何万羽と鶏工場的に飼う養鶏法。

*2 平飼い自然養鶏法

昔のように地面で飼う養鶏法で、広い鶏舎で雄鶏と共に悠然と暮らす。雌ばかりのこともある。普通自然養鶏の場合、餌にもこだわり鶏の健康とその卵を食べる人の健康を考える。

*3 安過ぎる卵

昭和20年代、風呂代が10円、ハガキが2円の時代に、卵は1個10円した。

